

歴史を語る建物たち

山形編

今日、20世紀型の開発優先社会は終息を迎え、文化、景観、観光などの側面から歴史的建造物が見直されるようになってきた。平成8年の登録有形文化財制度の発足などは、その象徴である。しかし、一方で、文化財指定を受けていないがその価値は十分にある古い建物が、道路の拡幅などで無造作に壊されていく現状もある。本シリーズでは、文化財指定を受けた有名建造物から、街中にひっそりとたたずむ建物まで幅広くスポットを当て、それらの歴史的経緯やエピソードなどを紹介する。

本間美術館「清遠閣」(酒田市)



酒田駅からすぐ、庄内交通バスターミナルの道向かいにある本間美術館は、文化10(1813)年建築の本館「清遠閣」と庭園、昭和43年建築の新館で構成されている。

本間家ではほとんど使わなかった「別邸」

江戸時代に、新興勢力ながら持ち前の才覚で発展し、庄内藩主・酒井家との結びつきを強めていた本間家は、酒井家の領内巡見の御休み処として、当家敷地に別邸(清遠閣)と庭園(鶴舞園)を建築し、酒井家に納めた。これは、北前船で栄えていた酒田港で働く港湾労働者の冬季失業対策でもあった。

この事業は、本間家4代当主・本間光道によって行われたが、光道は「公益の祖」と呼ばれた3代当主・本間光丘の長男であり、父の背中を見て育った光道が、地域のため、また地域で働く人のために、このような事業を行ったことは想像に難くない。

ところで、いったん納めた別邸および庭園は、ほどなく酒井家から本間家に下賜された。したがって、維持管理は本間家が行った。下賜後も酒井家は御休み処として別邸を利用していたが、本来は本間家の敷地ゆ

え、藩主より「自分が使わないときは自由に使ってよい」との配慮がなされた。しかし、本間家では趣味の茶室を除いて建物を使うことはなかった。

明治維新以降も、別邸は昭和天皇(東宮時代)を始めとした皇室の方々や、三条実美、大久保利通ら政府高官の宿泊地として利用され、「酒田の迎賓館」と呼ばれた。この間も本間家では茶室以外の建物は一切利用せず、ひたすら維持管理に努めた。これは、贅沢を良しとしない本間家の家訓と、「徳は得」という光丘の教えを忠実に守ったからだといえよう。

GHQやヘレン・ケラーも来館

戦後間もない昭和22年、清遠閣(現在の本館)と鶴舞園を一般開放して、戦後初の私立美術館「本間美術館」を開いた。その設立趣意は「敗戦直後、日本国民総てが自信を失った混沌とした世相の中、日本美術を鑑賞し伝統文化の良さを知ることで自信を回復させ、地方文化の向上・発展に寄与する」(同館ホームページ)ことであった。

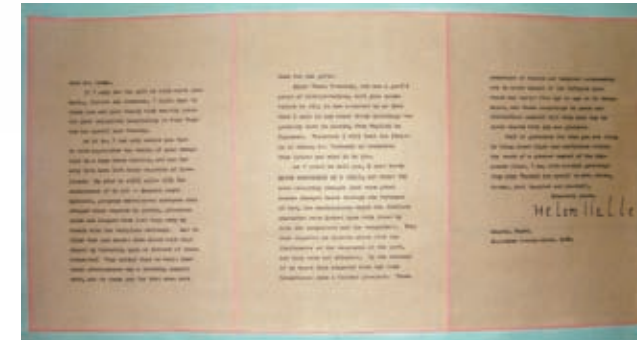
なお、戦時中は帝国美術院附属美術研究所(現:独

立行政法人国立文化財機構 東京文化財研究所)が酒田市に疎開していたことから、「本間家の人々も研究所の先生からいろいろと話を聞いていたことが、本間美術館開設につながったのではないのでしょうか」と田中章夫館長は語る。

一方、日本一の大地主といわれた本間家が戦後の闇市の元締めを行っているとの密告があり、GHQは、まだ幼かった本間家当主・真子氏の後見人である本間祐介を山形市に呼びつけ取り調べを行った。しかし、それはまったくのウソであり、さらに美術館設立の話聞いたGHQはいたく感銘し、悪路の中を山形市からジープで美術館に訪れた者もいた。

以来、本間美術館はGHQに接収されることなく、むしろ日米交流の架け橋としての役割を果たした。

昭和23年に来日したヘレン・ケラーが本間美術館を訪れたのもその一環である。江戸時代より視覚障害者に対して支援を行っていた本間家にヘレンは強い関心を持ち、後に直筆のサインを記したお礼の手紙を送っている。



ヘレン・ケラーより本間家に送られた手紙。文章の最後には直筆のサインが記されている。(本間美術館所蔵)

入札会に重要文化財級の逸品?

地域の復興のため、本間美術館では昭和24年より「歳末助け合い」諸品即売・入札会を始めた。

これは、事前に美術館が出品者から品物を集めて館内に陳列し、オークションをする企画であり、販売価格の1割は酒田市内生活困窮者募金に充当された。

なお、出品された品物に対し、美術館ではあえて真贋鑑定を行わなかった。それゆえ、重要文化財級の逸品が信じられないほどの安値で売られたり、逆に二東三文の品が高値で売られたりすることもあったという。しかし、田中館長は「入札会には毎回多くの方が訪れました。皆さん、そうしたことも承知の上で入札会を楽しんでおられたのではないのでしょうか」と話す。

しかし、中には落札しても品物を買わない人がおり、田中館長も学芸員時代に新潟まで落札品を持っていき、「間違っに入札した」と突き返された経験を持つ。「落札者がどうしても買わないので、出品者に品物を返して入金をあきらめてもらうよう説得するのが辛かった」と、田中館長は当時の思い出を語る。

入札会は昭和50年代まで行われていたが、ある時期



第1回入札会の帳簿。出品された品物名や出品者、落札者、最低表示価格、最高落札価格などが記されている。このページに記された品物は、全て本間家10代当主・本間真子氏が出品したもの。売れずに「返納」となったものもある。(本間美術館所蔵)

より専門業者が大量に出品して会本来の性質が失われてきたことから、昭和55年を最後にその幕を閉じた。

地域のために美術館ができること

田中館長は、酒田市のような地方にある美術館の意義を「都会でなくても本物の文化に触れることができ、来館者に感動を与えられること」と言う。一方で、歴史ある建物を地域の財産として人々の心に残したいとも考えている。

その意味で、近年、子どもの来館者が少ないことを田中館長は憂える。子どもはさまざまな感動を理屈ではなく体で覚えるから、そうした時期にこそ本物の文化に触れてほしいという。実際、来館者の中には、子ども時代に入選した自分の絵を探してほしいと訪れる年配の方もいるそうだ。

田中館長も小学生時代、学級新聞の取材で本間美術館を訪れている。もっとも、「真面目に取材をするのはもっぱら女の子で、私たち男の子はかくれんぼをしたり庭園の木に登ったりして怒られました。その私がこの美術館に勤め、まさか館長になるなど夢にも思いませんでした」と照れ笑います。それでも、子ども時代に、歴史ある建物で本物の文化に触れたことは良い思い出であり、貴重な体験だったと振り返る。

ところで、本間美術館では、3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震により被災・避難した方々の入館料を3月末日まで無料にした。4月上旬に終了する「雛祭古典人形展」も5月まで延長する予定だ。田中館長は「震災以降、来館者が減って経営は非常に厳しいです。将来的に維持できるかも不安です。しかし、美術館が今できる社会的役割は、文化に触れて少しでも心をいやしていただくことしかありません。ですから無料化は当然のことですし、休館もしません」と言い切る。そして、「先人が歩んできた労苦を思えば、この苦境もきっと乗り越えられると信じています」と強く言った。(フィデア総合研究所 研究員・山口泰史)